

ひきこもりの子どもをもつ父親がフォーマルな社会資源を利用するまでのプロセス —複線経路等至性モデリング (TEM) を用いて—

○ 日本福祉大学 安藤佳珠子 (8139)

キーワード: ひきこもり支援 TEM ひきこもり支援

1. 研究目的

ひきこもり支援において、家族支援は特に母親から始まることが多い。家族は支援の必要性を感じているが、継続的に支援につながることは難しく、家族会のみ継続参加している家族も少なくない (KHJ2019; 中村・岩永・境ら 2006)。竹元(2022)は、ひきこもりの家族が家族会以外の支援と継続した関係を構築するための手がかりを検討するために、ひきこもりの子どもをもつ母親と当事者が支援につながるまでの過程を TEM を用いて説明した。その中で、父親のかかわりを検討することを今後の課題としている。ひきこもりの家族の特徴として、父親が子どもに対して無関心である場合が多いとされ (斉藤 1998)、父親と子どもの関係が事例研究として取り上げられることは少ない。本報告では、ひきこもりの子どもをもつ父親が支援につながるまでの過程を TEM を用いて検討する。

2. 研究の視点および方法

ひきこもりの子どもをもつ父親 A さんに、これまでの経過について、半構造化面接でインタビュー調査を行った。インタビューの項目は、「ひきこもりの若者およびその家族がなんらかの支援にかかわるまでの状況」「ひきこもりの若者、その家族がこれまでにかかわった支援」「支援過程におけるひきこもりの若者、その家族の変容」とした。インタビュー時間は 120 分であった。分析にあたっては、インタビューの逐語録を精査し、A さんと子どもが家族会以外のフォーマルな社会資源を利用するまでのプロセスを、複線経路等至性モデリング (TEM) を用いて分析した。

3. 倫理的配慮

本報告は、日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査の承認 (承認番号: 21-055-02) を得て実施した。

4. 研究結果

以下、A さん (60 代)、子ども (30 代) の概要を示す。中学 2 年生に不登校になり、その後 17 年間、自宅でひきこもる生活をしている。ひきこもり始めてから 15 年目に精神科を受診し、発達障害の診断を受け、週 1 回の訪問看護が入るようになった。図は、A さんと子どもが家族会以外のフォーマルな社会資源を利用するまでのプロセスを示している。

このプロセスを 3 期に分けた。「I 期: 子どもの不登校とそれによって生じる葛藤」では、A さんの子どもの将来に対する不安から叱咤激励や登校干渉を繰り返す。児童相談所にも相談に行くが、A さんのほしい言葉 (子どもが明日から学校に行けるような魔法の言葉)

をもらえず、継続的に相談に行く意味を見出せない。そんな中、「熱心に対応してくれる支援者に出会【SG（社会的助勢）】」い、「ひきこもりの家族会を紹介される【OPP（必須通過点）】」。「Ⅱ期：Aさんが受け止められる場としての家族会」では、「家族会に参加【BFP（分岐点）】」し、子どもの不登校について同様の体験をもつ家族に話すことができ、今まで抱えてきた心の重みを一気に下ろすような感覚になる。そこからAさんは家族会を通して、子どもへの接し方や不登校、ひきこもりについて学ぶ。ひきこもりに関するさまざまなフォーマルな社会資源について学びながらも、それを使うまでに至らないという状況が続く。

一方で、Aさんの熱心な家族会活動によって「地域の支援者や家族会からの信頼を得る【SG】」。

「Ⅲ期：父親としての自信の回復」では、「地域のひきこもり家族の代表として、行政の会議に出席したり、講演のパネリストとしてこれまでの出来事を話したりする【BFP2】」。Aさんがひきこもりの子どもをもつ父親として自信を回復していく中、「精神科の受診を子どもに提案し、子どもと受診する【EFP(等至点)】」「訪問看護の利用を子どもに提案し、利用する【EFP】」「障害年金の手続きを主治医から提案され、子どもと一緒に相談し手続きをする【EFP】」といったフォーマルな社会資源を利用するに至る。

5. 考察

EFPに至るプロセスにおいて、ひきこもりの子どもをもつ父親が親としての自信を回復することが示唆された。子育てにおける日常的な葛藤は、子ども本人だけでなく親の自己肯定感を低下させ周囲とのつながりを困難にするため、親が社会と接続していくには親としての自信の回復が必要である（山根 2022）。Aさんは、「ひきこもりの子どもをもつ親」としての経験が、家族会以外でも評価されたことが、Aさんの親としての自信の回復の一要因になったと考えられる。Aさん親子に見られるように、ひきこもりの家族が支援につながる過程において、当事者やその家族の自信の回復が重要な検討事項となりうる。

謝辞：本稿は、JSPS 科研費若手研究「ひきこもりの若者を対象としたソーシャルワークにおける仮説モデル構築に関する研究」（研究代表者：安藤佳珠子、研究課題番号 18K12984）、JSPS 科研費若手研究「ひきこもりの家族を対象としたセルフヘルプグループのエンバウメントに関する研究」（研究代表者：安藤佳珠子、研究課題番号 21K13469）の助成を受けて行ったものである。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。
KHJ 家族連合会(2019)「長期高齢化する社会的孤立者(ひきこもり者)への対応と予防のためのひきこもり地域支援体制を促進する家族支援の在り方に関する研究」
斎藤環(1998)『社会的ひきこもり』PHP 新書
サトウタツヤ・安田裕子編(2023)『カタログTEA(複線経路等至性アプローチ)』新曜社
竹元雅也(2022)「ひきこもり当事者の母親の関わりが変化するプロセス」『子育て研究』(13)、pp26-42
中村光・岩永可奈子・境泉洋ら(2006)「ひきこもり状態にある人を持つ家族の受療行動の実態」『日本精神衛生学会誌』21(2)、pp26-34
山根佐智子(2022)「発達障害の子どもの母親にとっての『障害受容』という記号のもつ意味」、安田裕子・サトウタツヤ編(2022)『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述』誠信書房、pp233-255

